



「羽根木プレーパーク」で元気に遊ぶ子どもたち

遊びながら育つ！ 子どもが主役の 遊び場

NPO 法人
「日本冒険遊び場づくり協会」副代表

天野秀昭

あまの・ひであき

1958年、東京都生まれ。20歳の頃、自閉症児との出会いをきっかけに“遊びの世界”の奥深さを実感する。79年に開設された日本初の民官協働による冒険遊び場「羽根木プレーパーク」で常駐のプレーリーダーを務め、その後、地域住民とともに世田谷・駒沢・烏山の3プレーパークの開設に携わる。子どもが遊ぶことの価値を社会的に高め、普及し、実践するための2つのNPO法人「日本冒険遊び場づくり協会」「プレーパークせたがや」の立ち上げに参加し、両法人の理事を務める。2009年4月からは、大正大学人間学部人間環境学科のびのびこどもプロダクトコース特命教授として、遊びにかかわる大人の育成を目的として教鞭をとっている。著書に「よみがえる子どもの輝く笑顔」（すばる舎）。



子どもが持つ
自ら遊び育つ力

編集部 子どもたちが遊ぶ環境づくりにとりくまれていた天野秀昭さん。まず最初にうかがいたいのですが、子どもにとって「遊び」とは何でしょう？ 大人にとっては「危ない」「汚い」「うるさい」遊びが、子どもにとっては魅力であったりします。

天野 生まれたての子どもは、何もかもが初めてのことでばかりです。やったことがないことに挑戦しながら、子どもは自分がやれることを広げていきます。やったことがない訳ですから、それは自分の限界に挑戦することであり「危ない」のは当たり前です。でも、それを大人が「危ないからやめなさい」と行動を規制するのは、子どもが自ら育とうとする気持ちをそぐことになります。

編集部 危険を伴う遊びは、子どもの能力を育むことにつながっている訳ですね。

天野 例えば、階段の何段目から飛

び降りられるかという遊びがありません。子どもは危ないとわかってやっています。限界に挑戦することが、子どもの遊びの本質です。こうして常に自分の限界に挑戦している子どもは、自分の限界を知っているので無茶なことはしません。もしケガをしても、必ずその子の肥やしになります。すり傷や切り傷といった小さなケガを繰り返して、子どもは大きな危険から身を守る力をつけていきます。本当に危ないことを察知する「危機察知能力」と、いざ何か起こった時に対応できる「自己防衛能力」。これらは、遊びの中で養われます。決して大人が教えることはできません。

編集部 時には痛い思いをしながら危険への対応能力を高め、子どもは自分の世界を切り開いていく。「遊び」には、自分で自分を育てる力があるのですね。

天野 そうなんです。この力を、僕は「遊育」と呼んでいます。教育は「教え、育てる」ことで、物事を教える大人の価値観が優先されます。遊育は「遊ぶ、育つ」ことで、遊んでいる本

人が主役です。遊びは、自分の核を育むことであり、心という自分の内なる世界、生きていくことの実感を築いていくことです。ですから本来、遊ぶことの主役は子ども本人でなければいけません。今は、大人にとって価値がある遊びだけを子どもにやらせて、子どもから遊びの主役であることを奪っているのではないのでしょうか。

遊びの世界をもっと知りたい



編集部 天野さんが子どもの「遊び」に関心を持ったきっかけは何だったのでしょうか。

天野 私は美術大学の学生だった頃、子どもの表現ということに興味を持っていて、近所の子どもたちに図工を教える造形教室の指導員をしました。当時、入念に授業の準備をして一生懸命に絵を教えようとするのですが、子どもたちはやる気がない。そんな日々が続く、教えるのがイヤになりました。そんなある日、天気がよくて、教室で絵を描くより、外に出て遊ぶことになりました。そのうち、

子どもが蝶を追いかけだし、僕もいっしょになって追いかけていると、ある子どもが「僕、これを描く」といいました。すると、他の子どもたちも「僕も」「私も」といって、教室に絵の具を取りに戻り、みんなで絵を描くことに。その時に描いた絵が、とっても素晴らしいかったです。

編集部 大人が押し付けるのではなく、子どもが自分で表現したいと思うことが大切なんですね。

天野 そうです。その時に、僕は「やってみよう」という子どもの自発性を動機づける「遊び」の力を実感しました。

また、僕が自閉症の子どもたちを支援するサークルに入っていた時のこと。ケンちゃんという自閉症児を担当することになったものの、どのように接すればいいのか見当がつかず、うまくコミュニケーションがとれなかった。ケンちゃんは、そんな僕の存在をストレスに感じて、自分の腕を噛む自傷行為をするようになりました。本当にショックでした。この子にとって、僕は害にしかなら

ていない。どうしたら良いのだろうか」と途方に暮れました。仕方なく、彼がやりたいようにさせ、いつも側にいて見守ることに。よく見ていると、彼は匂いに興味があることに気づきました。道に落ちていたものを拾っては匂いを嗅ぎ、顔をしかめたり、時には幸せそうな表情をしたり。ケンちゃんはどんな匂いを嗅いでいるのだろうと思う、僕も匂いに興味を持つようになつたら、徐々にコミュニケーションが持てるようになったのです。

編集部 ケンちゃんの遊びの世界に身を置くことで、2人の間にあった垣根が取り払われたのですね。

天野 私は、ケンちゃんの世界の中にいてもいい人間になれたのです。造形教室の指導員をしていた時もそうでした。いっしょに蝶を追いかけ、遊びの世界を共有することによって、子どもたちとの距離が近くなった。「遊び」って何なんだろう。僕はあらためて、子どもの遊びの世界をもっと知りたいと思うようになりました。

編集部 その後、子どもの遊びに

もっとかかわりたいと、天野さんは東京都世田谷区にある日本で最初にできた冒険遊び場「羽根木プレーパーク」で活動を始めます。

天野 ちょうど開設されたばかりの「羽根木プレーパーク」が、1年間の長期ボランティアを募集していました。そこで僕は、子どもたちが自由に遊べるようにサポートする常駐のプレーリーダーとして派遣されたのです。常駐のスタッフは僕しかいないので、誰も止める人がいない。子どもも「やりたい気持ち」を優先して、やりたい放題でした(笑)。

編集部 冒険遊び場では、一般の公園にある禁止事項をなるべくなくすようにして、自分の責任で自由に遊ぶというモットーを掲げていますね。

天野 子どもたちはふだんできないような遊びをしたり、いろんな工夫をこらして、イキイキとした表情を見せてくれました。当初は、危ないなどの苦情がたくさん出ましたし、けんかなどのトラブルも起きました。でもそれ

が子どもたちの関係を育て、人と人とのコミュニケーションを積み上げていくことに。ここでの経験をとおして遊びの世界の奥深さを感じました。

編集部 1年のボランティア期間後に天野さんの慰留を求める署名活動が起き、区と地域住民が給与を負担する初の有給プレーリーダーになりました。

住民と行政が協力して遊び場が誕生！

編集部 日本の「冒険遊び場づくり」の活動は、いつ、どのようにスタートしたのでしょうか？

天野 1975年、わが子の遊ぶ様子から子どもの遊ぶ環境に疑問を抱いた一組の夫婦が、当時ヨーロッパで盛んに作られていた冒険遊び場に感銘し、こうした遊び場が日本の子どもたちにも必要ではないかと、遊び場づくりの活動を始めました。

編集部 当時の冒険遊び場は、住民や学生などのボランティアで運営さ

れていたようですね。

天野 そうです。そうした遊び場の実績を踏まえて、世田谷区が国際児童年だった79年に記念事業として冒険遊び場づくりを採択。地域住民と世田谷区の共同事業として、全国で初の常設「羽根木プレーパーク」が誕生しました。地域住民のとりくみが、世田谷区を動かしたのです。

編集部 現在、冒険遊び場は全国にどのくらい広がっているのでしょうか？

天野 「羽根木プレーパーク」が誕生して20周年を迎えた98年、「冒険遊び場全国研究会」を開きました。冒険遊び場づくりに興味を持つ全国の団体に声をかけ、56団体、約380人が集まりました。さらに、全国で活動する各団体のネットワークづくりと冒険遊び場の普及をめざして、2003年にはNPO法人「日本冒険遊び場づくり協会」を設立。3年に1度、全国集会を開催し、340団体ほどが参加するように。

少しずつですが、冒険遊び場は増えています。行政との協働事業として

とりくんでいるのは全体の半分くらいで、常設で有給のプレーリーダーを雇うなど、行政がお金を出すところも徐々に出てきています。

東北の被災地で遊びを通して心のケア

編集部 日本冒険遊び場づくり協会では、東日本大震災の被災地での遊び場づくりにもとりくまれていますね。

天野 はい。子どもは、どんな時でも遊びを通じて自分の心をケアする力を持っています。

編集部 イヤなことや悲しいことが





あった時、歌をうたったり、友達と大声を出して走り回ることですッキリするということも、遊びをとおしたケアですね。

天野 そうです。大人は、子どもたちがそういう力を安心して発揮できる環境を整えてあげればいいのです。そこで僕たちは、東日本大震災の被災地である宮城県気仙沼に遊び場を作りました。自然がたくさんある東北では、遊び場の必要性はそんなを意識されていませんでした。とこ

ろが津波ですべてを流されてしまいい、子どもたちの遊び場がなくなっていることに気づいたので。気仙沼に作った遊び場を見に来た人たちが、自分のくらす地域にも欲しいと新しい遊び場がどんどんできました。仙台に4つあった遊び場が、震災後には東北全体で34か所に増えています。生活だってもまならない状況ですが、子どもには遊び場がなにより大事だと大人たちが考えたからだと思います。

編集部 それは素晴らしいことですね。

天野 子どもたちは、遊び場で見違えるように元気になっていきます。子どもの自分をケアする力は、本当にすごいですね。子どもたちが元気になることで、大人たちも元気になっていったのですから。

みんなの居場所ができる！

編集部 冒険遊び場には幼児や小学生だけでなく、10代20代の若者、30

代40代の親世代の大人たちもいて、ワイワイガヤガヤ集まっているのが魅力的ですね。

天野 子どもや親たちはもちろん、近所の高齢の方たちが日なたぼっこに来ることもありますからね。子どもたちがベーゴマで遊んでいると、「おっ！懐かしいな」と気軽に声をかけてくれます。

編集部 大人たちも昔を思い出しながら、子どもたちとつながっている。子どもの遊び場がいろんな人の居場所になっているんですね。

天野 冒険遊び場に子どもを初めて連れてきた親が、子どもの後ろにくっついて「これをしちゃダメ」「こうしなさい」といつている場面がよくあります。でも、何度かここに来るうちに、子どもに指示や制限をする親はいなくなります。

子どもを自由に遊ばせて、親は親同士で楽しんでいる状況が生まれると、〇〇ちゃんのお母さんではなく、□□さんと個人名で呼ばれるようになります。親としてはなく、ひと

りの人間としての居場所ができます。遊びを通じて、その子がその子のままでいられる。その人がその人のままでいられる。本来、遊び場はそういう場所であるべきだと思います。

編集部 子どもといっしょに遊び、自由に話せる仲間ができ、子育てに大切なことを学び合える貴重な居場所にもなる。冒険遊び場は、子どもだけのものではなく、親も成長できる場になっているのですね。今日は貴重な体験をお聞かせいただき、ありがとうございます。

Present

天野秀昭さんのサイン入り著書をプレゼント!

『よみがえる子どもの輝く笑顔』
すばる舎

3名様

本誌綴じ込みハガキにてご応募ください。

